

第二十九回

伊藤園 お茶新俳句大賞

俳句とは・・・

俳句とは、五・七・五の十七音からなる、日本独自の定型詩の事を指し、「季語」と呼ばれる季節を表す言葉を含まなければならないというルールがあります。

「俳諧(はいかい)の句」という言葉が略されて、「俳句」と呼ばれるようになりました。

●特徴・・・必ず用いられない季語

俳句は、和歌の上の句(五・七・五)と下の句(七・七)を別々の人が交互に作る連歌(れんが)の上の句だけが独立してできました。江戸時代に松尾芭蕉が「俳諧の句」として確立させ、大流行しました。

俳句は十七音という限られた文字数の中で、自然の美しさや人の心情を表現しなければなりません。

そこで、季語を入れる事によって、作者の意図する情景をわかりやすく表現する事ができます。

季語とは、その言葉が入るだけで、誰もがその季節を思い浮かべられる言葉の事を言います。

●起源・歴史・・・江戸時代に確立

「俳句」という言葉は、今からおおよそ百年前、正岡子規(まさおかしき)を中心としたグループによって使われるようになりました。

俳句は江戸時代には俳諧と呼ばれていました。

この俳諧という言葉は、もとは「こっけい・おもしろ味」といった意味で、室町時代から江戸時代にかけてさかんに創られた連歌で使われていたものです。

連歌はもともとは、優雅な美の世界をめざすものでしたが、やがて本来の道からそれてこっけいな言葉の遊びとなりました。次第に、連歌の上の句(五・七・五)が独立して鑑賞されるようになり、今の「俳句」のもとになりました。

この独立したかたちのものを、「俳諧の句」と呼びます。

江戸時代には「奥の細道」の作者で有名な松尾芭蕉などが活躍し、広く庶民にも俳諧の文化が流行しました。

その後、明治維新後に登場した正岡子規が、この古くからの詩のかたちを、新しい詩としてよみがえらせようと考へ、「俳句」という名前をつけました。そして今なお、その形態が継承されています。

新俳句とは・・・

「季語」などの俳句がもつ厳密なルールは問いません。季語がなくても、多少「字余り」「字足らず」であってもかまいません。

厳密なルールにとらわれず、感じたこと、思ったことを五・七・五のリズムに乗せて

自由に表現する独自の表現手法は「俳句」ならぬ「新俳句」です。

第二十九回

伊藤園のお茶新俳句大賞

はらぐくのはらぐくりかた……

◎はらぐくをしくる二つのやくそく

★五・七・五の十七音でつくってみましょ。 (十七音のしらべ・リズムがいのちです。)

キャッチボール＝ () 音 チューリップ＝ () 音

チョコレート＝ () 音 やぎぬつじゆつ＝ () 音

にやあにやあ＝ () 音 じゆぢゆつぢゆつ＝ () 音

しよひほら＝ () 音 きやりーはみゆはみゆ＝ () 音

★ひよひのはらぐくはひとつだけきぎをいれてみましょ。 (はらぐくはきぎにかたらせる詩です)

(×)みのむしがあたりみわたすあきのかぜ↓(○)みのむしがあたりみわたすかぜのこえ(おと)

◎むしぐくはらぐ

★○は二音のじゆほ(きぎ)をいれてみましょ。(↓リント)

△○○○ちるひらりひらりと右まわり ↓ はるのはな おはなみ かんじーもじ

△せの^{たか}高いあ^{おとな}の○○○○は大人かな ↓ きいろくておおきなつのはな

△くひひもにくやしちのくる○○○○○○ ↓ かけっこ リレー きばせんなど

△○○○○の^{なか}ね中をのぞくとにじ色^{いろ}だ ↓ こぶまきやくろまめだてまきがはいつている
おしよつがつのおりよつり

うれしい、たのしい、おいしい、かなしい、さびしいなどのきもちを
あらわすじゆばはつかわずに、きもちのつたわる「く」をしくりましょ

小学生の部(低学年)過去作品集

プールあと体が地球にへばりつく

お母さんいつもかわいいはぐをする

まだなにもしやべってくれないふきのとう

からすの目ぼくをうつしてとんでった

りようはしにぶらさがりたい三日月だ

きんぎよすくいわたしも金魚もひっしです

ぬいぐるみずっと使うとわたし色

くつひもにくやしきのこるうんどう会

音楽よ雪のねいろになってみろ

ただいまにアンパン一つこたつの上

しん友としやべりつづけた山のぼり

かまくらの中ですずめが温まる

さつまいも空が見たいところげ出る

高くからがんばれよとふじの山

ゆうやけにかげあそびしてさようなら

第二十九回 伊藤園お〜お茶新俳句大賞応募学校紹介

日本語俳句編

〈様々なジャンルで活躍されている審査員が魅力〉

会津若松市立一箕小学校 山岸裕美先生

当校の生徒にとって俳句は身近な存在です。季節に合わせた俳句を廊下に常に掲示している他、国語の授業とは別に、「一箕（ひとみ）タイム」と言って放課後の30分を使い、月に三回程度俳句創作の時間を設けています。

低学年の生徒にとって五・七・五で表現する俳句は、とても新鮮なようで遊び感覚で俳句と接しているように思えます。学年が上がるにつれ、俳句のレベルが高まっているのは明らかです。

また生徒だけでなく、父兄からも俳句を集め発表会を設けるなど家族揃って俳句に取り組んでいるのも特徴です。毎年、二月には全児童の俳句をまとめた俳句集を制作しています。

新俳句大賞は、俳句界の第一人者をはじめ様々なジャンルで活躍されている方々が審査員なので、いつもとは違った視点で審査いただけるのがとても魅力的です。

〈三つのポイントでわかりやすく指導〉

磐田市立磐田第一中学校 村松明子先生

俳句の授業では、「俳句を身近な存在にする」、「一度に十七音を創らない」、「読んだ方に考えさせる俳句を創作する」の三点をポイントに指導しています。

まず、生徒にとって俳句を身近な存在にするために、授業では同年代の方の作品が掲載されている「お〜いお茶」の商品を紹介するほか、当校で上位賞に選ばれた作品を紹介することで、俳句に対し接しやすしい環境を作っています。

次に俳句の創り方ですが、はじめに五・七（上句・中句）もしくは七・五（中句・下句）を創ります。残りの五音に季語を入れたり、適切な言葉を入れると、説明的な俳句にならず、面白い句を創ることができます。

最後に、俳句の楽しさの一つでもあるように、読んだ方に「これってどういったことだろう」と考えてもらえるような俳句を創作するよう教育しています。

三つのポイントを生徒はしっかり理解しているので、モチベーション高く俳句の授業に取り組んでおり、その結果、第二十七回新俳句大賞に多くの入賞入選者を輩出することができたと考えています。

〈同年代の入賞句を活用〉

帝塚山学院中学校 若林三枝子先生

毎年、冬休みの宿題で俳句を創り、新俳句大賞に応募しています。

新俳句大賞の特徴の一つでもあると思いますが、俳人だけでなく同年代の方でも上位賞に選ばれることが、生徒にとってモチベーション高く俳句創作に取り組んでいる理由だと思えます。

著名な俳人の句だけでなく同年代の面白い俳句を紹介することで、生徒たち自身の言葉でも俳句を創れることを認識させることができ、新俳句大賞は俳句授業には欠かせないものとして活用しています。

〈継続的に創作することで、俳句のレベルアップを図る〉

愛知県立安城高等学校 高橋貴絵先生

当校は、俳句創作に熱心な先生がいることもあり、文芸部や二年生を中心に積極的に取り組んでいます。生徒たちは、最初は文章として成り立っていないなくても、継続的な俳句創作で、創る形が徐々に分かるようになり、さらに、そこに当てはめる言葉には何が良いかなど、生徒自ら言葉を考えるようになっているようです。

そして修学旅行などの学校行事や、自らの体験を詠んだ俳句は良いものが多くできていると感じています。授業や課題などで創作した俳句は、時期や内容に合わせて新聞俳壇や、俳句コンテストなどに投句しています。

新俳句大賞は、四年前から冬休みの課題として取り組まれています。コンテストに応募し、賞に選出されることで、生徒は自分たちの創作意義を感じているようです。新俳句大賞は「お〜いお茶」に掲載されるため、生徒のモチベーションにつながるコンテストとして活用しています。